

アランの『幸福論』における幸福への道について Ⅱ

山井 徳行

この論文は、名古屋女子大学紀要第三十七号(人文・社会編)に発表された論文「アランの『幸福論』における幸福への道についてⅠ」の続編である。そして、この論文により一応完結する。

幸福の逆説的因果律

幸福は青い鳥のようにいくら探しても見出せるものではない、すなわち幸福は一種の蜃気楼のようなものだという意見がある。しかし、それをアランは断罪する。サロンで人気を博すための洒落でしかないと言うのだ。そのような気の効いた警句は幸福の幻影しか捉えていない。幸福は宝くじの当たりの様に降って来るものでも、飾り窓の商品の様に金を出して買えるものでもない。そのように考えるから、失望して幸福は蜃気楼に過ぎないなどと言いたくなるのだ。

幸福は探すものではなく、今この瞬間に手に持つものだと言はう。それは未来に獲得しようとする対象にはなり得ない。人間の生の瞬間瞬間にすなわち現在、持っていて初めて幸福と言える。これは何を意味するだろう。まず、幸福は誰でも手に入れることのできるようなものであるということだ。金の鉞脈のように人間がお互いに競争して奪い合うようなものではない。高価な宝石や衣服と

いった金で手に入れて保管できるようなものではない。そうすると、人間の中にあるものとなる。

そんなことは明白なことだと言われるかもしれない。今まで人間はそう考えて来たではないかと。だから、得体の知れないものとして蜃気楼に譬えられたりもするのだと。一般に、人間は幸福をとらえるために、ついその原因を想定してしまう。思考を支配している一つのカテゴリーである因果律が我々の知らないうちに働くのだ。純粹に物理的な現象にとつては完璧に当てはまる因果律は、幸福という精神的な現象或いは少なくとも心理的な現象を扱おうとしてそこに幻想を生み出す。その幻想の基本的な図式は、原因の稀少さと幸福の度合いに比例関係を見出そうとするものだ。例えばスポーツ競技において、優勝することが困難であればあるほど、そのもたらす幸福感は大きい筈だといった具合である。なるほど、一見もつとも思える。しかし、その論理を続けよう。準優勝であればその半分の幸福感ということになる。準準優勝であればそのさらに半分となり、一回戦で負けたら全くの不幸となる。果たしてそうだろうか。恐らく、そのような経験の無い人間ほどそう思うかもしれない。多少の人生経験があればこのようなはつきりとした原則が当てはまらないことは理解できるであろう。

我々が持ちやすい、幸福に関するこの幻想が明確になるのは、富・名声・名誉といったものを手に入れたと目される人間の自殺である。三島由紀夫の割腹自殺の衝動や、現代の英雄であるマスコミの人気者達の事件が一般大衆の興味を引くのは、まさにその幻想が激しく現実によって反駁されるからであろう。だから、創造力の枯渇とか隠された膨大な借金が存在などが推測される。すなわち、彼らの持つ、幸福を約束すべき輝かしい側面を帳消しにするのに相応しい不幸を探すのだ。その不幸にもほぼ同じ図式が適用される。貧乏・無名・不名誉などが不幸の確かな原因とされる。ただ、不幸になるのに努力はいらない。そのように思い込んでいる人間にとって、その因果律に自分を合わせるのはたやすいことだ。それで、外国になど旅行して自分よりずっと貧しい生活をしている人が生き生きとしていると驚いてしまう。

それにもかかわらず、人間は幸福に因果律を適用して夢見ることが止めない。そこから、大きな失望が生まれる。何故ならばそこに明らかな間違いがあるからだ。現実の生活のなかで獲得することが難しいと思えるものにその難易度に比例した幸福を想定するという単純で幼稚な間違いである。更に、その幸福は戦利品のように保管されるといふ思い違いである。

幸福とは常に現在において「なるもの」であり、恒常的に「であるもの」ではないのだ。それではいかに幸福になるのか。ギリシャの哲学者・ディオゲネスの言葉(よいものは労苦である)を引用してアランは言う、幸福の代わりに困難を探索せよ。有益で自由で困難な行動を選び取り、そして地道な努力の末に成功すれば、そこに確実な幸福がある。誤解のないように付け加えれば、そのような困難な行動は幸福を約束するようにはけっして見えない。反対に、我々

の想像力を刺激して必要以上に労苦を強調するかもしれない。だが、それを克服した者を待っている幸福がある。幸福はそれを求めない者に授けられる思いがけない褒美であるという逆説の意味がそこにある。

二つの幸福

ここで我々は幸福に関してアランの主張の中に、一つの矛盾を見出す。アランは幸福とは探すものではなく、現在自分の手にしつかりとつかむものだと言う一方、今度は行為の結果与えられるとも言ふ。それはアランの思想に論理的整合性が欠けているといった問題ではない。短い随想であり、そこに厳格な論理を見ようとするのは無理であると考え方にも賛成できない。それは我々の思考を刺激するためにアランが仕込んで置いた謎解きのようなものなのだ。

それではこの矛盾の意味はなにか。それは二種類の幸福を区別することによって説明される。

アランは到る所で知覚と行動の人間に対する力を強調する。人間の中で一番幸福なのは、常に明確な対策を要求する具体的な事件に四六時中取り組まざるを得ない警視総監であると言ひ、さらに泥棒やヤクザ集団のように常に知覚し行動している人間たちも幸福に違いないと言ふ。書齋で活字を追っている人間に不健康感が漂うのは反対に、自分の外に明確な目標を定め世界の出来事を知覚しそれに基づいて行動する人間にはどんなに辛い行動であろうとも清々しい健康感が漂う。精神の諸力、すなわち記憶・思考・判断・意志などを考慮しないで単純に考えてみよう。そうすると、子供の遊びが示すように明確な規則のもとで身体を動かすとき、人間は自分の存在を忘れて無我夢中になることがよく分かる。すなわち、人間が具

体的目標を与えられて、自己の肉体をある程度制御して行動するとき、人間の生命は世界にたいして放たれて燃焼するのだ。生命の管が全開されて、純粹な生きる喜び・幸福がある⁽⁹⁾。これが、アランのいう現在手の中につかんでいなければならない幸福の意味なのである。これは生きていくだけで全ての人間に与えられている幸福であり、それを情念や間違った考え方で台無しにしないかぎり、誰でもそれを享受できるのだ。生命に忠実な人間は幸福でないはずはないのである。命は喜びであると表現できよう。しかし、人間はそのような動物的な無垢な喜びをも苦悩に変えることが出来る才能を持っていることを忘れてはならない。それが、アランがよく引用する不眠症の苦しみによって象徴されている⁽¹⁰⁾。

生命体であることの幸福は、人間の半端な知識や卑小な虚栄心によって阻害されない限り、人間を困難な行動に向かわせる勇気を与える。例えば、将来の困難な試練を前にして我々の心はとかく乱れがちになるのだが、そこで予想される種々の労苦にもかかわらず希望を持つことが出来る人間が居る。アランは言う、希望するとは、すでに幸福であることだと⁽¹¹⁾。このように、幸福な人間は敢然と艱難辛苦を予想させる行為に立ち向かって行く。そしてその行為の後に、もう一つの幸福がある。

そこに山があるから登るのだと言った寡黙な登山家の話は有名である。山が有りそれに登ろうという意欲がある。ただそれだけではない。種々の道具の準備・登頂ルートの研究・気候に関する知識が必要だし、登山の技術をしっかりと身につけなければならない。またどんなに周到な準備をしても強靱な体力・咄嗟の場合の判断力が必要なのは言うまでもない。一つの山を征服すると今度はもっと高くて難しい山といった具合に登山家の目標は尽きないもの

だ。彼らはよく自分の能力の限界に挑むと言う。山登りのような、世俗の欲と掛け離れた無益な行為に彼らが見るものは、自分の力の開花以外のなんでもあろう。このように人間の生命は実際の困難を触媒として樹氷のように見事に結晶すると考えることが出来る。山を征服した人間の見る風景が美しいのは、それに自分の生命の結晶を映していると考えればよく理解できよう。幸福とはまさに自分の力の認識なのである⁽¹²⁾。

第一次世界大戦に一志願兵として参加したアランは戦争に関して著作も残した多くの言及もしている。もちろん、戦争の悲惨さ・残忍さについての観察もあるが、戦争の魅力・叙事詩性についても語っている。戦争とは全く否定すべき悪そのものでしかないと言われて来た我々は、どうしても戦争の持つ華々しい・輝かしい面を無視する傾向がある。敗戦の惨めさのみを強調する戦争理解は逆に我々を戦争の魅力に対して無防備にする危険がある。戦争には生死の境で人間が自己の能力を最大限に發揮して困難で具体的な問題を俊敏に解決していくという一面もある。食料の調達・武器や物資の輸送・露営・行軍・通信・暗号の解読など兵士の知恵を必要とする雑多で具体的な問題が山のようにある。それを限られた時間の中で死の危険を感じながら実行して行く。それも敵の動きを観察しその意図を見抜き対抗策を瞬時に実行する必要がある。そんな厳しい仕事の中で人間は自分でも思いがけない力を発見するとしても不思議はない。例えば、ベトナム戦争においてアメリカの侵略に反逆するベトナム兵士の顔の輝きやソビエト軍に抵抗するアフガニスタンのゲリラの凛々しい姿などが報道されてきた。そこには巨大な困難に勇敢に向かっていく人間の姿があるのであり、それが多くの仲間と共に行われるとき感情の高揚が見られるのだ。

孤独な登山家・勇敢な兵士と極端な例を出したが、それは人間の幸福の構造を明らかにするためであった。困難な行為がある。具体的な当座の目標を立ててそれに立ち向かう。知覚・思考力・判断力・意志・肉体を存分に利用して努力する。そして、目標をなし遂げる。喜びが生まれる。それが困難な行為をなし遂げるための一歩の前進なのだ。また新たな目標を立てる。同じような努力。そして成功。喜び。さらに新たな目標を掲げる。行為を完遂するまで繰り返される。目的の完全な達成は安堵と喜びをもたらすであろう。しかし、それで終わりではない。人間はまた新たな労苦を求める。このような行動には確実な幸福があると思われる。それは人間が自分の力を困難な行為を通して発展させそれを実感する喜びなのだ。この幸福は生命の発展すなわち能力の向上を認める喜びなのだ。この幸福も生命力の認識であるが、違う点はそれが困難という触媒を使った弁証法的な認識であるという点である。

幸福と喜び

さて、二つの幸福を区別した。そして、その二つの幸福とも自分のものとして我々が認識するときには、その根底に喜びがある。喜びを感じることにによって自分が幸福であることを意識するのである。すなわち、幸福とは喜びなのである。自らをどうしようもない樂觀主義者と規定するアランは喜びを最大限に評価する。喜びは寛大であり、人類の宝であり、全ての装飾の源泉であると言う。他人に対して我々がなすことが出来るのは喜びを分け与えることであり、それこそが真の同情であると言う。この喜びへの礼讃は我々にとっても非常に理解しやすいものだ。実際に、喜びに満ちていることが人生の理想であると大半の人が思っている。問題はいかに人生

の苦悩や悲しみを解決し自分の生活を喜びで満たすかにある。すなわち、いかに幸福になるかというこの論文の主題であるのだ。

二つの幸福という概念を抽出したが、それは当然二つの喜びの概念を内包している。前述したようにデカルトは喜びを六つの基本的な情念の一つと考えており、我々は情念の克服こそ幸福の条件であると繰り返して述べてきた。アランはデカルトの情念論から出発しており、その説を受け継いでいると考えてよい。問題は、喜びである幸福に到るために、情念としての喜びの制御が必要であるとなってしまうことである。我々の今までの立論が一つの矛盾に陥ったかの様に思われる。実際に、我々はアランの『幸福論』における幸福を追求して来たのであり、それはアランの幸福の考え方の矛盾として受け取られかねない。この点を解明しようと思う。

第一の幸福は生命体としての原始的な生きる喜びを基礎にしていることは明らかであろう。それは人間だけではなく、動物も植物も感じているように思われるものである。人間以外の動植物に精神がないとすれば、それらは生命体として存在していても喜びも悲しみも感じないことになる。すると、我々が動植物に感情移入しているということになる。このデカルトの動物機械論、さらにアランはその説を受け継いでいるのかどうかはこの小論の核心からずれるので深入りしないことにしよう。なにはともあれ、健康な子供達なら必ずこの生きる喜びに輝いている。子供たちは嬉しいかどうかと尋ねられればちゃんと答えることが出来る。すると、かれらはその喜びを意識することが可能なのだ。そして、この喜びが精神のなにかの力によってというよりも、身体の健康さ・快調さによって与えられることはあきらかであろう。すると、この喜びは身体の健康さという善によって精神の中に惹起されたものだから、情念なのである。

だが、この情念自体をよく観察すれば、身体の緊張を解きほぐし心をのびやかにして、人間を心身ともに解放するという特徴を持っていることに気が付く。であるから、この情念は身体の中でくすぶって想像力を刺激するということがほとんどない。ということは、この情念は思い出されて再体験されることがすくない、従って増幅されることも余りない。それゆえ、アランはこの情念を何度も意識的に再体験することを奨励してさえている。スタンダールにおけるEGOTISMにはその知恵が見える。

さらに、他の情念が明確な対象によって引き起こされるのに対して、喜びはその原因が主に身体の快調さにあるのであり、それは特定の対象と結びつきにくい。その対象の欠如ゆえに、同じ状況の喜びは想像力の中で再体験されることはすくない。むしろ、我々がこの喜びに満ちている時、周囲のあらゆるものを快く感じるのが一般的であろう。ここから、喜びは全ての装飾の源泉であるという考えが出てくる。この生命力を刺激するものは美しいのである。多くの芸術家たちが自分たちの幼年時代にこだわるのも実にここに原因があるとと思われる。両親の保護のもとに生活の苦労から自由で、その若さ故に強靱な生命力を享受している時期にはどんな世界も美しさに満ちているものであろう。なにもあれ、喜びという情念はその解放性により人を拘束しない。更に言えば、我々の生命の自己認識であるから、それは我々の心を慰め体に活力を与えるのである。今までは、この喜びという情念の特異性について説明しなかった。そこから、前述の矛盾が生じたのである。ただ、情念としての受動性を持つていることについては他の情念と変わらないが、結局、我々の心身を伸ばやかにするのだから制御される必要はないのだ。

第二の幸福についてはどうだろうか。困難な行為を人間が精神の

力を最大限に發揮して解決するとき感ずる喜びには、力強さでも形容できるものがある。それは単に身体の健康な状態によって精神の中に湧いて来るような受動的な感情ではないのだ。例えば、飴・お菓子といったものは我々に束の間の快楽を与える。そこには極めて受動的な喜びがある。それは瞬間瞬間萎えていくような喜びである。それに対して、芸術家が創造するとき得るのは、自己が強くなつていくような喜びである。快楽は人間を悲しくさせさえるのに反して、困難を克服したときに感じる喜びには自己を鼓舞するような強さがある。

第一の幸福について語ったとき、我々は行動を強調した。それは同時に肉体の存在を強調することであった。我々の生命力は肉体によって実に明確に表現されるからであった。しかしここでは反対に、肉体を最大限切り捨てた行為を考えてみよう。数学に代表されるような知的行為であろう。随意筋の麻痺にもかかわらず、壮大な宇宙の誕生に関する仮説を唱えた英国の物理学者の例に見られるように、人間の知性が肉体から独立した喜びを持ち得ると言えよう。そのとき一体何が活動しているのか。それは、表象力・記憶・思考・判断・意志という精神の諸力の活動である。感覚所与から概念を構築し、それを記憶し、それを結合して思考し、そこから出てくる命題を判断する。そのような行為をすることを意志する。すなわち、精神が活動している。その活動から力強い喜びが生まれる。そうなれば、この喜びは精神の力の確認であると言えよう。デカルトは精神の感動であるという⁵⁷⁾。アランは幸福は力という⁵⁸⁾、これは間違いなく精神の力の意味である。このように、精神は外的な困難を克服するとき自らの力を確認する。そこから、情念としてではなく精神の感動としての喜びが生まれる。それが我々がいう第二の幸福の実

体である。

幸福、その基盤としての喜びを二つに分けて考察して来たが、誤解を防ぐために断つて置きたい。それは第一の幸福や第二の幸福の区分はアランの説く幸福の概念を理解する手段であり、純然とした仕方では我々の実生活の中に現れるのではないことである。実際に、精神の全く関与しない行動を経験することは不可能であろうし、精神が肉体に宿っている限りそれから全く影響を受けないことも不可能である。すなわち、情念としての喜びが精神の感動を全く含まないことも、精神の感動が情念としての喜びを全く伴わないことも有り得ない。我々の経験がそれを実証してくれる。問題は、どちらの喜びが主であるかも見定めることである。そこから、我々の幸福の質が明らかになる。

便宜的ながら、二つの幸福とそれを支える二つの喜びの概念を摘出したが、この二つのカテゴリーに入らないもう一つの喜びがあることに気付く。それは、虚栄心の満足のような喜びである。これは他人との比較を前提とするという意味で、社会的な喜びである。同じ理由で、極めて不安定な喜びである。比較する相手は非常に多数であるから、その相手によって喜んだり悲しんだりする。その意味で依存的・従属的である。しかしながら、この喜びに支えられる幸福も存在すると言わなければなるまい。

この種の喜びの起源は何か分析してみよう。社会において、人間同士を比較する雑多な基準が文化の中に存在することは誰でも認めるところであろう。例えば人間の所有物の優劣の比較などはきわめて一般的なものである。子供たちはビー玉・めんことといった彼らの宝物の比較に大変敏感だし、大人は自家用車や家の自慢をしたがる。所有物は結局財力に帰されるから、財産・収入の比較となる。この

ような比較は極めて日常的に行われている。所有物だけではなく、人間の肉体・精神の諸性質も比較の対象となる。いわゆる餓鬼大将は腕力が強くて勇気のある者であるのが普通である。肉体の形を基準として美人・不美人が決まってくる。学校の成績で生徒を比較することは、記憶力・思考力といった基準で優劣を論じていることになる。このような比較において、対象に選ばれた他人より自分が優れていることを認識し、それを我々自身の資質の優性として考えるとき喜びが生まれる。すなわち、ちょうど寒い戸外から暖房のよく効いた室内に入るとホッとして嬉しくなるように、自己の優等性の意識が身体を刺激し暖めると嬉しくなるのである。であるから、この喜びは情念なのである。自己認識の曖昧さがこのようなことを許すのだが、このように自己の所有物あるいは先天的な肉体的・精神的資質を自己と混同することは極めて頻繁に起こることである。注意しなくてはならないのは、この喜びは自己の資質の享受それ自体に由来するものではなく、他人との比較からくる虚栄的なものである点である。

喜び自体は人間の心身を伸びやかにする性質を持っているから、この喜びもそれ自体は悪であると言えないであろう。しかし、この喜びを享受するということは他人との比較を自らに許すことであり、そうなると当然このような態度は比較における自らの劣性を認めざるを得なくなり、喜びと同じ仕組みで悲しみを感ぜざるを得なくなる。そして、人生においては比較は常に不利なのである。それはオリンピックの金メダルは一つしかないことでも明らかである。さらに、悲しみは人間の心身を縛り付け不吉な想像力を掻き立てて我々を無益に悩ませます。この虚栄心の悲しみを避けるために、虚栄心の喜びを禁じることに真の知恵があると言えよう。アランは人

間はそれぞれの完璧さを追求せよと言って、この虚栄心の幸福を遠ざけることを勧める。

世間でよく観察されるもう一つの幸福、幸運の幸福を考えてみよう。宝くじに当たれば誰でも喜ぶ。そこには我々の肉体的な資質も精神的な資質も関与する余地はない。それゆえに、我々の喜びも大きいと言えよう。我々が値しなかつた報酬が与えられる。そこに、神の加護という考えや「ついている」というやはり神秘的な考えが顔を見せる。理性的に考えればそれは単なる確率上の偶然であるが、個人の中では幸運として捉えられる。このように、この喜びは小さな蓋然性の上に乗った不安定なものであり、そして宝くじに当たらないことが普通であるように大きな蓋然性の不運と隣合わせなのである。それゆえに、多くの哲学者達はこのような幸福を当てにすることを無意味なこと・危険なこととしてきた。その論拠も虚栄心の喜びの危険性に関するそれと同様なのである。

幸福と意志

人間は意志し発明することによってしか幸福ではないとアランは言う⁽⁶⁰⁾。

さて、第一の幸福と我々が名付けたものも意志を必要とするのだろうか。それは生命の喜びであると我々は考えたのだし、そこに意志というような精神が関与するのは不可思議であるという意見も出てこよう。しかし、子供が集団で遊ぶときそこには当然規則がある。子供はある特定の遊びを自分で発明しているのではなく、遊ぶということを意志しているのではない。若き生命の塊として自然と動くのである。規則がその動きに方向と形を与え、命はのびやかに外に出ていく。子供はその規則に従おうとする。それはすでに自己の生

命・肉体を制御しようとする意志である。確かに、それは大きな困難・労苦を予想しながらも自己を奮い立たせる意志とは次元が違うにしろ、自己を制御しようとする意味で意志なのである。

我々は自分の生命を選んだのではないことは明白だ。我々は生まれて来る。そして、生きていく。その意味で、生命はそれ自体で自然に始まる⁽⁵⁹⁾。人間の真の問題はそれにどの様な方向を与えるかであり、そこに根本的な意志の存在がある。それは子供が遊びの規則に自らを従属させる、あるいは箸で食事をする作法のような日常生活の動作を身につけるといった具体的な時点から既に始まっている。このような余りに当然ゆえに意識されにくい意志が欠如する結果はどうか。それは規則が無視された子供の遊びを想像すればすぐわかる。混乱であり、そして何よりも子供の自分に対する怒りである。それはまさに醜態である。

人間が自らを制御することを止めて、物事に対して受け身になって仕舞うと、結局人間は悲しくなる。我々の身体は意志によって統制を受けなくなるや否や、各部分が自分勝手な主張をして混乱してしまう。その混乱は自己に対する怒りを生み結局は悲しみを生じる。それは自分では何もせず人が自分を楽しませるのを待っている王様のようなものだ。彼の心に入ってくるのは喜びではなくて悲しみなのだ。それも怒りを込めた悲しみだ。何故ならば、人が自分を楽しませないのを不当に思うからだ。実際は、自分の機嫌に任せたままにしておいて自分に苛立っているだけなのだ。自分を充分に分析できず、権力があるので部下に八つ当たりをしているだけだ。そういった意味を込めて、悲観主義は機嫌により楽観主義は意志によるとアランは言う⁽⁶⁰⁾。

このように、生命体としての基本的な幸福を得るためにも意志す

ることが必要である。しかし、単に意志すると頭で念仏を唱えても仕方がない。意志には明確な対象或いは目的が必要だ。意志が対象に向けられると、そこに広い意味で行動が成立する。アランにおいて、意志の必要性の強調は行動への賛美となる。それは子供の遊戯から大人の仕事・冒険といった、明確な目標を持った人間の行為を示す。それらの行為を心を込めて行うことは、この意志の確認という面を持つだろう。仏教の教えには、日常の生活が修行であるという考えがあるが、それもこの根本的な意志を意識して生きろと言うことだろう。柔道などの肉体的鍛練を道として捉える心も同じである。

第二の幸福は先ず困難と労苦を求める。そこに打ち勝つべき障害を認めて、それに進んで立ち向かおうとする。人間とはそういうものだとアランは言う。すでに説明したように、精神が自らの力を確認して感動するという人間存在の根本的な法がそこにあるからだ。人間をそのような行動にかき立てるものは何かと言えば、それは精神力或いは根性といった言葉で表現されるものである。そして、それは精神の何を意味するかと言えば意志なのである。簡単に上述したように、精神の諸力は次の通りであろう。まず、感覚器官を通して与えられる所与から表象を造りあげ、そこからさらに概念を構築する能力が表象力であり、その表象・概念を保存して置く記憶力であり、さらにその概念を結びつけ命題を立て判断を下す思考力があり、思考に基づいて行動を起こす意志がある。ここでは認識論の詳細に立ち入ることなく、我々の人生で重要視される精神の諸力を上げたが、ここで我々の行動にとって根本的な力は意志である。意志が人間にある行動を促さないとしたら他の能力は結局意味がなくなる。例えば、ある山に登るといふ意志があつて初めて、登山に関する技

術の知識や計画を練り上げた思考作用が有効になるのである。さらに、実際に山に登るに従つては観察・状況判断・行動を繰り返すのであるが、その登山という全体の行為を支えているのは登山をしよという意志なのである。即ち、我々が精神力あるいは根性と呼ぶのは意志の力なのである。困難・労苦を自ら選んで克服しようとするとき、その意志の力は勇氣と呼ばれる。この意志なくして第二の幸福はない。

幸福と誓い

幸福へ到るために行動への意志の重要性を強調した。しかし、我々は常に情念によって自己を見失う危険にさらされていることは「情念と想像力、そして行動」のところでも述べた。自己の喪失の危機とは、「真の自己の探究」で明らかにしたように、行動の選択の迷いなのである。ある状況で一定の行動を選び取れないとき、自己が動揺するのである。動揺した自己は情念によって曇りつけられた想像力に翻弄されてさらに迷いを深めていく。思考力も判断力も鈍り身動きの出来ない状態になり、そのような自分への苛立ちが募って行く。それは袋小路である。自己のアイデンティティの危機である。それゆえに、優柔不断が人間の最大の悪であるという考えが出てくる。そのような状態から抜け出るためには、なにしろ一つの行為を選ばなくてはならない。極言すれば、その行為の優劣などどうでもいいのだ。とにかく、行動によってその悪から抜け出なくてはならない。だが、行動は我々をある方向に連れて行く。偶然に行動を選ぶというよりは、その方向を制御しないということの意味する。優柔不断であるよりは、何らかの行動を選ぶ方がいい。しかし、人間は自分の人生の計画を立てる。全く受け身で外的な要因に依存した生を

考えることは不可能であると思う⁶³。人間の生命は一つの有機体なのであり、秩序だった表現を必要とする。そのような意味で、人間はどんなところでも自分の運命に従うとアランは言う⁶⁴。すなわち、どんな状況に居ようとも人間は自分の個性を発揮するように生きていく。そのような宿命を帯びていると言えるだろう。それはちょうど多くの川が海をめざして流れていくのと同様だ。地形により様々の模様を描きながらも海へと到達する。この現象を統べているのはもちろん重力である。人間のなかにも重力のような力が働いているとしてもアランは言いたげである。それが結局は意志ということになる。

人間はみな特殊な状況の中で、生存に必要な基本的な欲求を満たすための活動をしながら、種々の情念に囚われそれに抗いながら生きていく。言語を持ち概念を操作するという動物としては高級な知的活動をしながら、社会の中でそれぞれの仕事に従事して生きている。概念とは人間にとって極めて便利な道具であると同時に、人間自身を巧妙に拘束することになることは、以前に情念の構造について述べたところで明らかにした。記憶・想起が無ければ情念は形成されない。動物たちが本能的に行うことを人間は知的作用を通して行っていると考えられる。

動物は本能に導かれて生きていくのだが、そのかわりに精神を与えられた人間は生きんとする意志に従うために本能にかわるものを必要とする。それが精神力としての意志であり、それを明確な概念で状況に応じて表現するのが誓いである。具体的な内容を持たない誓いは存在しない。その内実とは意志が明確に概念化・言語化された行動である。誓いは言語・概念という手段を用いるために我々自らの意志を鮮明に呼び起こさせる。誓いは、その証人として他人の存在や聖なるものを想定する場合でも、結局自分が選んだ行動を

実行することの自分自身への宣言である。それは時間も空間もそして予想される困難も超越する。さらに、その個人の時々々の心持ちをも超越する。誓いには時効も安全地帯もない。また、その気にならないからと誓いを破れば当然卑怯者になる。

このように誓いというものを理解するときアランの次の言葉がより簡単に理解されよう。どんなに奇妙に思われても幸福になると誓わなければならぬとアランは言う⁶⁵。すなわち、この幸福への誓いは自らの身体を制御することの意志表示なのであり、この様にして我々が第一の幸福と呼んだ生きている喜びを、ただ生きているというだけで得ることが出来る。そしてそれは、極めて日常的であり全ての人間にとって手軽であるという意味で、最も有効な情念への治療法なのである。幸福な人間は情念に対して最もよく武装しているのだ。ゆえに、社会的人間として我々は幸福であらねばならない義務が出てくる⁶⁶。また幸福は大いなる美徳であるとアランは宣言する⁶⁷。この幸福への誓いには、生命自体は喜びであるという考えとその喜びは意志によって実現されなければならないという意志的な樂觀主義が見事に表現されていると言えよう。

幸福への誓いが生存のあらゆる瞬間において有効であるのにたいして、困難・労苦さらに危険を予想させる行為の前での誓いはいかなる意味を持つのか。この種々の予想は我々のなかに当然重苦しい感情・緊張などを生み出す。さらに時間を与えられれば、想像力を刺激して不吉な未来や障害を描き出し我々の行動を阻止するように働く。その時、そのような内部の抵抗を振り切って行動に移るのには極めて強い意志が必要となることは容易に理解されよう。誓いがその決断の力を与えるのである。更にまた、誓いが想像力を抑えて余計な心理的困難をつくり出すのを防ぐのである。

この誓いを支えているのは、当然まず、自尊心・名譽の意識であり、困難な行動の成功が我々に与える喜びへの理性的な信頼である。その喜びを勝ち取ることでできる精神力への信頼である。信頼するのは我々であるのだから、すなわち自信である。誓いを守り現実と戦い勝利することにより、その自信は深まる。そして、我々は自らの存在の実体としての精神を認め得るようになる。

幸福の現在性

我々が生きるのは常に現在である。辛かったあるいは楽しかった過去を思い出すのも我々が生きているこの現在であれば、不吉な予感に不安になるのも将来の明るい見通しに胸を弾ませるのも現在という瞬間においてである。人間はこの時間的有限性によって規定される。理論的には現在は無限小の瞬間となり、それを捕らえることは不可能のように思える。しかし、我々が生きていることを意識するとき、そこに現在は見事に実感されている。すなわち、そこに持続が成立している。この持続を伴った現在、すなわち一般的に理解されている現在のこの理解で我々の小論には充分である。すなわち、持続の解明という問題にはここでは立ち入らない。

幸福であらねばならない、幸福である義務があるとアランは主張した。そして、幸福であるのは常に現在においてである。その意味では、幸福であるという表現よりも幸福になるという表現がより適切であろう。我々は男として生まれれば、死ぬまで男である。また日本人として生まれれば、その国籍を放棄するまで日本人である。そのような安定した状態と幸福は決定的に違う。幸福とは意志によって恒常的に追求されなければならない。幸福とは一度修得すれば以後ずっと有効である資格とは違う。幸福とは我々が朝、目覚め

て新しい日を迎える度に新たに獲得されるべき獲物のようなものである。

我々の陥る間違いは、幸福になるためにはこれが必要だというように因果律によって考え、その条件の獲得に必死になることである。もつとも、そのような目標を持って行動しているとき、人は往々にして幸福なのだが、いざその条件が全部揃って見ると期待したほど幸福でない。少なくとも、その幸福は長続きしない。そこで、騙されたあるいは、はぐらかされたと思うのだ。そのような空虚な因果律から自由にならないといけない。また、過去の幸福の遺産の上に胡座をかいてはいられない。以前どんなに幸福であったとしても、現在幸福である必要がある。だから、幸福になろうという意志と誓いが重要になって来るのだ。

さらに、過去が想起されるのも未来が予想されるのも常に現在なのだから、その現在が悲しみで覆われていると我々の思い出も予測も悲しみという色で塗り込められてしまう。すなわち、現在の情念は過去と未来を歪める。そうになると、我々は客観的な判断を下せなくなる。幸福が常に現在において実現されなければならないのと同様に、不幸もそして情念も我々の現在にのみ存在しているに過ぎない。ただ、現在の不吉な想像力を通して過去と未来を汚しているに過ぎない。だから、現在の苦悩のみを堪え忍べはいいのだ。過去はもう存在していないのだし、未来はまだ存在していないのだから、そして、一瞬の現在の不幸はなにほどのことがあるう。このように、不幸・情念から身を守る知恵が不幸の現在性という事実から出てくる。

過去に幸福であったことは無益ではない。というのは、過去の楽しかった出来事を思い出して現在の不幸を慰めることが出来る。不

幸は人間の手助けを必要としないが、幸福は人間の意志を必要とするから、意識して過去の幸福を喚起する精神の努力が必要だ。これもまた幸福・不幸の現在性を利用する一つの方法である。すなわち、過去の幸福と未来の希望で現在の不幸を中和し消滅しようとするものだ。悪い体調のせいや人間関係のいざこざなどから、人間は不幸になりやすい。その不幸が不吉な想像力を刺激する前に、過去の素晴らしい思い出や未来の希望によってその不幸を押さえつけようとするものだ。そこには明確な意志が必要だ。何故なら、どんなに不思議であろうとも、人間が自然に任せて自ら意志しないとすれば、悲しみは喜びを打ち負かしてしまうからである。

幸福の現在性とは結局我々の生の現在性という基本的条件の一面なのである。過去がどうであろうとも、未来に何を夢見ようともすべてが現在の中で生きられる。思考もそうである。過去にいかなる思考をしたにしても、現在どんな思考をしているかが問題なのだ。自由や幸福といった概念も一度思考されたからといって終わるものではない。繰り返し何度も精神によって掲げられる必要のあるものである。

アランの『幸福論』が九十三のプロポと言われる随想から成立していることに、象徴的意味を読み取ることが出来ると「日本における幸福論」において述べた。実際、アランは五千以上もの随想を書いた。その中から、弟子が幸福という主題のもとに集めたのが、我々が分析の対象とした『幸福論』である。この本には我々が抽出しようとしたような幸福の体系的な理論はない。そのかわりに実生活の体験をふまえ、色々な切り口で情念の恐ろしさ・行動の重要さ・社会の慣習の持つ知恵・幸福への意志の重要さなどが執拗なほどに何度も何度も触れられている。このような文体に固執したアランは幸

福のあるいは生の現在性をしっかりと捕らえていたと思える。実際、毎日のようにこの随想を書き続けることが、アランにとって幸福への・生への意志の確認であったと言える。

このアランの本を読むと、水の中を自由に泳ぎ回る魚のようにアランの思考の動きを実感する。それは生き生きと動き回り我々の顔に飛沫を浴びせかける。それが何度読んでも何時読んでも新鮮である。そこには思考への、そして幸福への誘いがある。だが、その誘いを受ける者は自分の足で一步一步しっかりと進んでいかなければならない。

(注)

(43) アランの『幸福論』の五十と八十七を参照。以下、単に数字のみ注はアランの『幸福論』の九十三の随想(プロポ)の番号である。

- (44) 五十 八十七
- (45) 四十四 八十七
- (46) 四十七
- (47) 八十七
- (48) 四十三
- (49) 五十一 七十七
- (50) 九十三
- (51) 八十七
- (52) 四十七
- (53) 『SOUVENIR DE LA GUERRE』
- HARTMANN 一九三七
- PARIS など。
- (54) 四十 四十三 九十
- (55) デカルト『情念論』 六十九
- (56) 四十二

(68)	(67)	(66)	(65)	(64)	(63)	(62)	(61)	(60)	(59)	(58)	(57)
五十三	八十九	九十二	九十三	二十九	二十三	七十八	四十二	九十三	二十二	八十九	デカルト『情念論』 九十一